

タイムベーストメディア作品アーカイブにおける鑑賞性の保存・修復・再創造

2021 年度活動報告

第 17 回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展日本館展示への参加

ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展は、美術展と同様に、国が出展単位となる各国パビリオンと、旧造船所アルセナーレで開催される企画展からなる。日本は日本パビリオンを構え、国際建築展においては日本館展示として、指名コンペ形式で行われるキュレーター選出による展示を開催している。筆者は、2019 年に行われた指名コンペで選出された建築家・建築構法研究者で明治大学准教授の門脇耕三氏の企画に、コンペ段階でのアイデア出しから参加建築家としてメンバー入りした。他のコアメンバーは、出展者として、長坂常、岩瀬諒子、木内俊克、元木大輔、グラフィックデザイナーとして長嶋りかこが名を連ねる。

通常、国際建築展日本館展示は、コンペでのキュレーター決定から 1 年に満たない急ピッチで準備から展示制作まで行われる。われわれチームも 2019 年 7 月の決定から 2020 年 5 月の開催に向けて動き出し、新型コロナの暗雲が立ち込める中、4 月の段階ではあとは現地施工を待つのみとなっていた。

延期決定後は、果たしてどれくらいの延期になるのか、本当に開催されるのか、全く先行きの見えない中、web サイトの充実や、遠隔での搬入・施工の道筋を模索した。1 年延期の 2021 年 5 月からの開催が決定されたあとも、実際に開催されるのかわからないまま進まざるを得なかったものの、なんとかさまざまな協力者の活躍のもと、日本からは誰も現地に行くことなく、全て遠隔での展示制作も完了し、5 月 22 日の開幕を迎えることとなった。

新宿から小田急線で小田原方面に 3 駅の経堂にある住宅。日本のありふれた住宅を解体し、ヴェネツィアまで移動し、バラバラになった部材を展示しつつ、部分的に組み立てる。キュレーターの門脇耕三をはじめとしたわれわれ建築家チームが目にしたのは、ただのありふれた建築物ひとつでも、丁寧に紐解くことによって見えてくる歴史的な資料性である。1954 年に平屋として建てられたその住宅「高見澤邸」は、80 年代の初頭まで増築と増棟を繰り返してきた。家主である高見澤さん一家の成長とともにその姿を変えてきた住宅は、時代ごとに産業が生み出した建材が継ぎ接ぎされ、もともとの木造住宅にアルミサッシやトタン波板など時代ごとの工業製品が張り付くさまを、ごく自然にうけいれてきた。それらを丁寧に一つ一つ検証することで、ただの住宅だったものが、戦後日本の産業史を語るためのアーカイブとなる。そして、今現在に生きる建築家の存在を、その継ぎ接ぎの先に見たとき、建築を建てる行為は、社会や産業のアーカイブを作ることにはほかならない。そして、建築家は、建材など物質を取り扱いながら過去の積み重ねの連続の上で、それ自体が次なる行為の契機を生み出すような、建築や都市のスケールで現在進行形の資料体を作っている存在であるということが、われわれチームの主張である。

展示会は、このようなコンセプトのもと、「高見澤邸」を解体した部材、各部材の来歴や産業史的な側面を事細かく解説した動画、家主である高見澤さんのインタビュー、高見澤さん一家の変遷を示す家族写真など、アーカイブを日本館内部に展示し、日本館の外にある庭に、参加建築家たちによって少し改編されつつ再現された「高見澤邸」の部分インスタレーションが制作された。また、高見澤邸の情動的なアーカイブとして、各部材を一本一本 3D スキャンし、デジタルデータをネット上に閲覧可能な状態で提示した。

砂山太一（美術学部准教授）



砂山太一+木内俊克による「高見澤邸」の部分的な再構築



砂山太一+木内俊克による「高見澤邸」の部分的な再構築



ネット上に公開されている「高見澤邸」の部材 3D データ ©sunayama studio